

表 6.2-2(40) 調査、予測及び評価の手法（生態系）

環境影響評価の項目		調査、予測及び評価の手法	選定理由
環境要素の区分	影響要因の区分		
生態系	地域を特徴づける生態系 造成等の施工による一時的な影響 地形変化及び施設の存在 施設の稼働	9. 評価の手法 (1) 環境影響の回避、低減に係る評価 地域を特徴づける生態系に関する影響が、実行可能な範囲内で回避又は低減されているかを検討し、環境の保全についての配慮が適正になされているかどうかを評価する。	「環境影響の回避、低減に係る評価」とした。

表 6.2-2(41) 注目種選定マトリクス表（生態系）

【上位性種】

評価基準	キツネ	テン	オオタカ	イヌワシ	クマタカ
行動圏が大きく、広い環境を代表する	○	△	○	○	○
年間を通じて生息が確認できる	○	○	○	○	○
繁殖している可能性が高い	△	△	○	△	○
変更エリアを利用する	△	△	△	○	○
調査により分布・生態が把握しやすい	△	△	○	△	○

注：○；該当する △；一部該当する

【典型性種】

評価基準	アカネズミ	ノウサギ	ニホンアマガエル	カラ類
個体数あるいは現存量が多い	○	○	○	○
多様な環境を利用する	○	○	△	○
年間を通じて生息が確認できる	△	○	×	△
繁殖している可能性が高い	○	○	○	○
変更エリアを利用する	△	○	△	○
上位種の餌対象となる	×	○	×	○
調査により分布生態が把握しやすい	○	△	△	○

注：○；該当する △；一部該当する ×；該当しない

表 6.2-2(42) 調査、予測及び評価の手法（生態系）

注目種	調査手法	内容
クマタカ	生息状況調査	定点観察法による調査を実施し、飛行軌跡やとまり行動、採餌行動等を記録する。
	餌種調査	生息状況調査時に直接確認した種及びその地点の環境を記録する。また、ペリットを採集した場合にはDNA分析を実施し、餌種を把握する。
	餌資源量調査	餌種であるノウサギを対象として、糞粒調査による定量調査を行い、それらの結果から、環境類型ごとにノウサギの生息密度を把握する。
カラ類	生息状況調査	テリトリーマッピング法による調査を実施する。調査範囲の樹林植生において植生区別に調査ルートを設定し囀り等、繁殖活動に係わる行動の確認位置を記録し、環境類型区別に生息状況を推定する。
	餌資源量調査	樹林植生タイプに調査地点を設定し、各地点でビーティング法・スウィーピング法による昆虫類等節足動物群集の定量的採集を行い、室内で湿重量を測定し、植生タイプごとの餌量の相対値とする。